

手拭  
名稱

あくる二日も元日にかはらぬことぶき、焼初として風呂をとめさす、此代壹歩づ、に極れ共、客の器量次第、風呂屋の馳走によつて、高下品々あり、風呂へは下帯ながら入、ふるあがる時、銘々の下帯濡ながら板の間に捨、幾筋にても極て湯汲が物となりぬ、太夫よりそろへのゆかた、四尺五寸の大風呂敷、いづれも是を敷、引ふね大臣の後へ廻て、ゆかたごしに御背を撫て、髪をときすき立て後、香をとめ、ひつゑ、こきにて、茶せん髪、やり手が役として、羽二重の大は、を下帯だけに引き、端縫なしに人数程出す、風呂屋より吸物にて酒をす、む、此仕拂金三ばいにおよぶ、

〔新撰字鏡〕賦古内反、巾也、太乃已比、〔同〕戸侯古反、巾也、太乃已比、

〔倭名類聚抄〕澡浴具手巾 修復山陵故事云、白紵手巾廿枚、和名太乃古比

〔日本靈異記〕下二日盲男敬稱千手觀音日摩尼手、以現得明眼緣第十二

奈良京藥師寺東邊里、有盲人、略往來之人、見哀之者、錢米穀物施置巾上、略中

巾太乃已比

〔濫觴抄〕上巾、同帝神農氏作之、

〔事物紀原〕八舟車帷幪手巾、

禮浴用二巾、上絺下綌、雖上下異用、而無異名、此三代之制也、漢王莽之斥、逐王閔也、閔伏泣、元后親以手巾拭之、於是始見手巾之目、其事雖出於三代、而制名當自漢世也、

〔嬉遊笑覽〕二上服飾唐山の手巾は、大かた竹布なり、長サ四尺巾一尺ばかり、兩端六七寸種々に組て織たり、木綿よりは強し、故に長崎に來る商客は皆此方の手巾を用となり、銷夏錄曰、篔竹葉疏

而大、節相去六七尺、出九真、彼人取嫩者、颯漫、綃績爲布、謂之竹疏布、是なり、

〔類聚名義抄〕六中手巾 タノコヒ

〔伊呂波字類抄〕太雜物手巾 タナコヒ